



HOMO FABER
Crafting a more human future



press release

HOMO FABER 2022

Special column vol. 06

大角 幸枝 Yukie Osumi

重要無形文化財「鍛金」保持者(人間国宝)

槌目に映る、たゆたう時。

多様に存在する世界の金工のなかにおいても、日本の金工表現には特別な存在感があると大角幸枝は語る。

「西洋においては、金属の表面を光り輝くまで磨き上げ、そこに宝石を入れたり、エナメルを施したりして、いかに華やかに、煌びやかにみせるかに重きを置いているのに対し、日本はわざわざ錆をつけたり、燻すなどして鈍い光へと変えていきます。さらに象嵌でも、違う種類の金属やメノウやサンゴといった石など、マットで落ち着いた質感のものとも組み合わせることが多い。これには日本の気候が大きく影響していると思うんです」

周知のとおり、湿度の高い日本では、金属はすぐに錆びてしまうもの。しかし、それを物質の劣化としてではなく、静かに時が行き過ぎるなかで風景が移り変わり、その姿をゆっくりと変える様を美しさとして捉えることに、この国特有の美の理念が存在する。時間の経過に合わせ徐々に形を変えていく波や風の存在に魅力を感じ、題材としている大角の作品も、こうした日本の風土とそれに根ざす文化を基盤に生まれるものだ。

静岡の山村に生まれ、野山を駆け回り、豊かな自然と戯れながら育った大角は、父に似て手先の器用さには自信があったので、幼い頃

からものづくりに没頭。しかし、東京の美術大学に進学を目指した頃から、まわりとの感覚の違いに圧倒される。

「都会に溢れる鮮やかな色彩感覚が私のなかにはまったくなかったのです。しかも、基本的に何かしら役に立つものがつくりたいと考えていたので、純粹芸術にも向いていないこともわかりました」

総合的にものごとを俯瞰する意味も含め、大角は芸術学科を選択。さまざまな分野の芸術に触れるなかで、生活に密着した工芸の道を目指すようになったのは自然の流れだった。

さまざまにある工芸のなかで、金工に取り組む理由は手をかければかけるほどに手応えが感じられる素材だからだという。

「私はある種、不器用な性格なので、図面に起こしたりするのは不得意。自分の手を動かしてつづけていないと何も作れないんです。打つほどにしなやかに形を変えながら強くなる金属は、最初から最後までずっと自分の手元を離れず、手をかけて育てあげなければいけない素材。そこに没頭し続けられているのかもしれない」

超絶技巧としてもはやされることも多い日本工芸だが、大角自身は技の上手さだけに頼り



©Japan Kōgei Association

たくないとも語る。

「工芸は暮らしに必要な道具を目指すものだから、用途から形を組み立てていくのが基本。度を越えた技は意味をなしません。さらに、テクノロジーが大きく進化した現代でさらに高い技術を追求したいのならば、機械とコンピュータに頼ればよいだけ。工芸の原点には人が暮らしを彩り、楽しみながら過ごしたいという気持ちがあるはず。だから私は、私にしかできないこと、感じられないことをそのまま形にしていくだけ。それが一番楽しいのですし、大切だと思っています」



大角 幸枝／おおすみ ゆきえ

1945年静岡県生まれ。1969年東京藝術大学美術学部芸術学科卒業後、彫金の桂盛行、鹿島一谷、鍛金の関谷二郎に師事。端正な槌目を残す鍛金や鑿で金や鉛を打ち込む布目象嵌などの技法により、波や雲、風などを表現。1986年日本伝統工芸展奨励賞、翌87年日本工芸会総裁賞を受賞。2015年重要無形文化財「鍛金」保持者に認定される。